

22 ニホンザルにおける食物を巡る競合と競合回避

西川真理（京都大・院・理）

対応者：半谷吾郎

本研究では、野生ヤクシマザルに食物を巡ってどのようなタイプ・レベルの競合が存在するのかを明らかにし、低順位個体が採食競合をどのように回避しているのかを明らかにすることを目的とした。調査は屋久島西部地域に生息する人付けされた野生ヤクシマザル(E群)のオトナメス9頭を対象に7月、12月、3月におこなった。追跡個体の行動は分単位で記録し、視界範囲内にいる群れの他個体の数も記録した。また、対象個体が樹木で採食したときは、採食品目、伴食個体数、敵対的交渉について記録した。合計154時間の観察で274の樹木での採食バウトがみられ、14回の敵対的交渉がおこった。このうち9例がオトナメス間で、5例がオトナメスとワカオス間で観察された。採食樹内において攻撃者になるか被攻撃者になるかについては、順位による差はなかった。敵対的交渉には、身体的接触を伴うものや、優位個体が劣位個体を追いかける「激しい」交渉(7例)と、優位個体の接近により劣位個体が場所を移動する「穏やかな」交渉(7例)が見られた。伴食個体数は低順位個体で少なく、採食以外の活動時における周辺個体数も低順位個体で少なかった。低順位個体を観察している間、上位家系の個体とほとんど出会わない日もあった。以上のことから、低順位個体は群れの中心から離れてサブグループピングすることで直接的な採食競合を回避している可能性が示唆された。

23 ニホンザルにおけるオス間関係の交尾季、非交尾季間の比較

川添達朗（京都大・院・理）

対応者：半谷吾郎

本研究は宮城県金華山島に生息するニホンザルを対象として非交尾季とその後の交尾季でオス同士の親和的、敵対的行動を比較した。これにより非交尾季のオス間関係が交尾季のオス間の親和的、敵対的行動にどう影響するのかを明らかにすることを研究目的とした。調査は2009年5月～6月の非交尾季と、11月～12月の交尾季に行った。分析の結果、群れオス同士は季節を問わず交渉が少ないこと、群れオスと群れ外オスの間では非交尾季に比べ交尾季では親和的交渉が減少し敵対的交渉が増加したこと、群れ外オス同士は交尾季にはほとんど他個体との交渉を行わないことが分かった。また、非交尾季に群れオスと親和的でなかった群れ外オスはメスとの交尾に成功したのに対し、群れオスと親和的であ

った群れ外オスはメスとの交尾機会を得られなかった。以上の結果から非交尾季に見られるオス間の親和的行動は、発情メスをめぐるオス間の関係に有利には作用しないことが示唆された。今後さらに詳細な分析を行い、発情メスをめぐるオス間の関係を明らかにしたい。

24 下北半島のニホンザルにおけるアカンボウの採食行動

谷口晴香（京都大・院・理）

対応者：半谷吾郎

本研究は、2008年11月から翌年4月にかけて青森県下北半島に生息するニホンザル野生群の母子4組を対象に、母子間の採食品目の違いと採食時の母子関係を明らかにする目的で行なわれた。その結果、アカンボウは母に比べ高い位置にある品目は避け、小さな品目に時間を費やした。母が母子共によく利用する品目を採食した際には、アカンボウは母の2m内で同じ品目を採食することが多いのに対し、母がアカンボウのあまり利用しない品目を採食した際には、母と離れて違う品目を採食することが多かった。また母と離れた際、近い世代の個体と近接し採食することが多かった。以上の結果から、身体能力が未熟なアカンボウは入手や処理の困難な品目の採食をたとえ母から離れることになっても回避する一方で、その必要のない場合には母の近くに留まることで授乳や保護を受けられる機会を増やしていたと考えられる。また、母から離れた際に、近い世代の個体と集まり、群れからはぐれる危険を回避している可能性がある。ニホンザルのアカンボウは、母の採食品目によって食物や近接個体を変え、自らの栄養および安全を確保していたことを示唆する結果である。

25 色盲ザルの色覚特性の行動的研究

小松英彦、鯉田孝和、郷田直一（自然科学研究機・生理学研究所）、岡澤剛起（総合研究大学院大・生命科学・生理科学）、横井功、平松千尋、高木正浩（自然科学研究機構・生理学研究所）

対応者：宮地重弘

インドネシア由来のL錐体欠損による2色型色盲ザルの色覚特性を行動実験で明らかにするために色弁別課題を行わせた。これまでに得られた結果ではサルが色収差によるアーチファクトを手がかりとして弁別課題を行っている可能性が示唆されていた。この点について弁別課題を改良し、同一個体で行動実験を行った。赤と緑の単色に鋭いピークをもつ二種類のLEDを箱に組み込み、前面に設けた開口部からディフューザーを通して